十勝の有機　課題と未来④

普及へ地元消費カギ

2014年３月22日

食を通じ消費者との交流にも力を入れる宇井さん

生産者が有機農業を新規に始める際に課題となるのが、付加価値を付けて買ってくれる販売先の確保だ。新得町では４農家が北海道有機農業協同組合（札幌市）に農産物を出荷している。

４農家は1980年前後、離農跡地などを活用して道外から新規就農した。町上佐幌の宇井宏さん（58）は千葉県出身で、東京での会社員生活を経て80年に町内で農業を始め、87年から有機に転換した。

当時は、欧米を中心に基準の緩かった農薬による環境汚染が指摘され始めた時期。宇井さんは「自分の子供にも安心して食べさせられる物を」と考え、堆肥の自作などに取り組んだ。現在は2.6㌶の畑でジャガイモ、カボチャ、トウモロコシ、葉物、ソバ、ダイコンなどを栽培している。

組合に加入し札幌圏に出荷

当初は市場などに出荷していたが、より価値を理解してくれる消費者を求めて帯広市内での直接販売を行うようになった。ただ、団地などでの飛び込み販売は「買ってもらうのが大変だった」と振り返る。

その後、札幌などで有機野菜を販売する八百屋のグループと取引を始めたことで人脈ができ、2001年に設立された同農協に加わった。

同農協の主要取引先の１つにコープさっぽろがあり、宇井さんなど十勝の農家の農産物も主に札幌圏を中心に販売されている。一昨年９月にはコープさっぽろ主催で、宇井農場を会場に消費者と触れ合う交流イベント「畑でレストラン」も開催された。

妻の茂子さん（58）は地域の食を大切にする活動を行う「スローフードフレンズ北海道」のメンバー。夫妻は「これからも地元の食を楽しむ場所を提供できれば」と、農場を舞台にしたイベントを企画している。

消費者と交流　宅配事業にも

同農協の組合員（生産者）は昨年末で55人。取扱高は２億3000万円で年々微増しているものの、「価格が通常の農産物に比べて高いことや、有機の知名度がまだ高くないことなど大きくは広がっていない」（事務局）という。３年前からは個人宅への宅配事業も始め、約250人の准組合員（消費者）に直接届ける取り組みも始めた。有機の生産者も大幅には増えてはおらず、今後も取引する生産者を探している。

宇井さんに限らず有機農産物の主要な出荷先は札幌や東京など都市圏で、十勝での有機農産物の消費は進んでいないのが実情。今後、有機の生産が拡大していくには生産現場の努力だけでなく、地元で価値が認められ、消費や販売が広がることが大きな課題だ。

宇井農場で採れたての食材を楽しんだコープさっぽろのイベント（2012年９月）
生産現場の取り組みを伝えることも必要になる。